

広島原爆投下時の避難：
川と橋を越えて

松尾 雅嗣

広島大学平和科学研究センター

谷 整二

広島大学文書館

**Taking Refuge at the Time of the Atomic Bombing of
Hiroshima: Beyond Rivers and Bridges**

Masatsugu MATSUO

Institute for Peace Science, Hiroshima University

Seiji TANI

Hiroshima University Archives

SUMMARY

The present paper is a sequel to our previous one entitled “Rivers and Bridges as First Places of Refugee at the Time of the Atomic Bombing of Hiroshima.” Both in the previous and present papers, it is our belief that despite the vast research material and literature accumulated on the human damages and sufferings caused by the Atomic bombing on Hiroshima., there are a few missing pieces in the whole picture of the totality of the damages and sufferings. One such piece is the behavior of the sufferers on the day of the bombing before they arrived at some first aid station, relief station or hospital, or before they died. We know little about how they reached such places.

In the previous paper, first we showed that rivers and bridges were first places of refuge for many people. And secondly, we explored how they fled, or failed to flee, to rivers and bridges just after the atomic bomb explosion, and extracted four typical patterns of behavior: failure, exhaustion, sojourn, and success.

In the present paper, relying on the same data and method as before, we begin where the previous one ended, and examine how people crossed (or failed to cross) a river or a bridge after they arrived there.

The examination shows that the refugees who managed to arrive at a river or a bridge were faced with two major options. They could try either to cross the river, or the bridge. In the former case, they could try to walk or swim across the river, or to cross it by a boat. In addition, they might choose to stay where they were for various reasons, or they might take refuge in the river water, especially from the approaching fire.

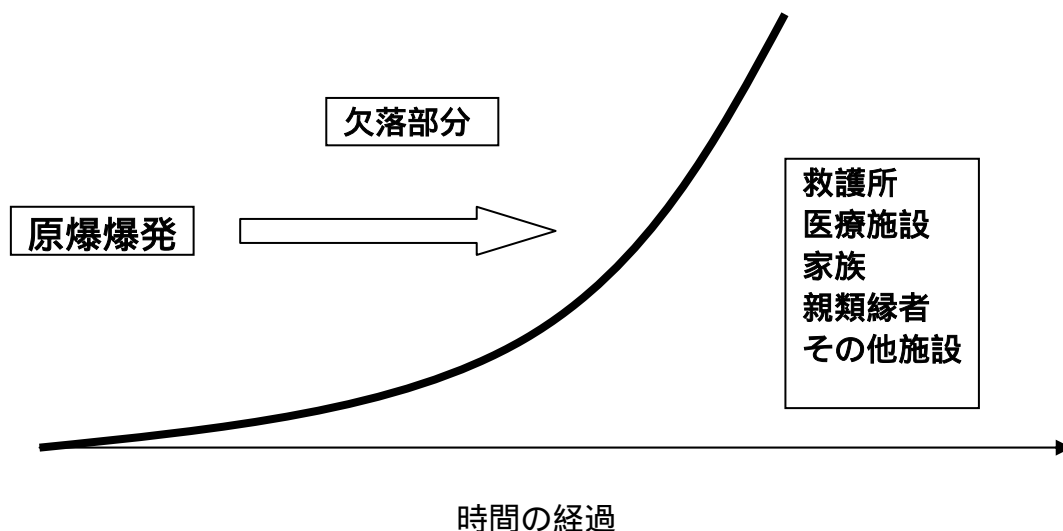
In all these choices, we find cases both of failure and success. But, we also find cases where refugees dissuaded themselves from trying to cross the river or bridge, presumably at the sight of so many tragic failures.

Ours is an attempt at shedding some new light on the hitherto unexplored aspect of the human damages and suffering caused by the atomic bombing on Hiroshima.

はじめに

広島に投下された原爆の爆発後瞬時に命を失った犠牲者は別として、他の大多数の被災者については原爆爆発時と救護施設に辿り着く間にいまだに明らかにされていない言わば時間的空白があるのではないかと、(多くの被災者にとっては最後の)避難場所である救護所や医療施設とそれ以後の被災の検討は成されているが、この避難場所に至るまでの被災者の行動の過程は十分に検討されているとは言い難いのではないかと、より正確に言えば、原爆爆発から一定の時間の経過の後に、救護所や医療施設や家族や親類縁者のもとに辿り着くまでの被災者の行動や状況については十分な検討がなされていないのではないかと。図式的に示せば、次の図1に示すような被災の全体像に欠落部分があるのではなかろうか。図の太い曲線を、被災者が救護所、医療施設、家族縁者、その他の収容施設に到着した時点とするならば、曲線の右下側については、十分といえるどうかは別として従来研究の蓄積がある。しかし、曲線の左上側に関しては、これまで十分な検討が行われたとは言い難い。

図1 従来の原爆被災研究とその欠落部分
出所：松尾・谷（2007）図1を修正

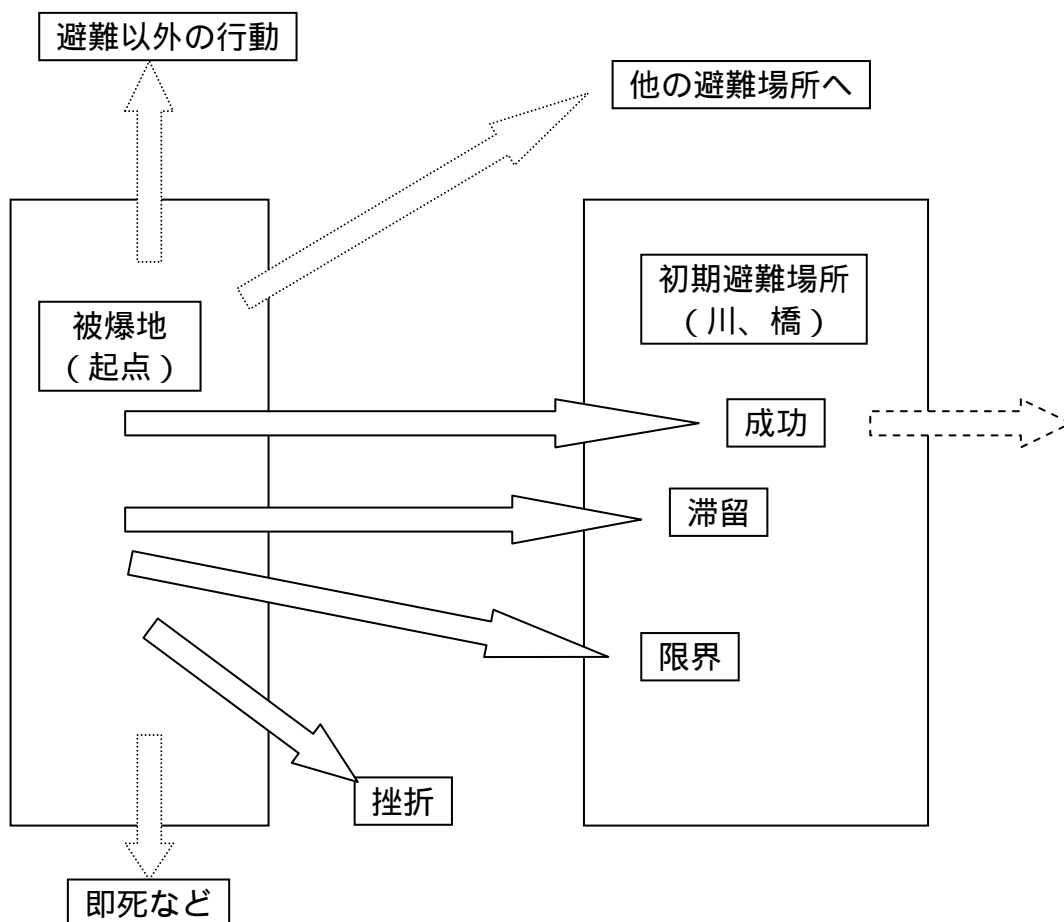


残された資料から推定すれば、20数万人の人々が避難先である救護所や医療

施設や家族や縁者のもとへ避難したと考えられる（松尾・谷 2007: 4-5）が、この人々は図式的に言えば、図の太い曲線の方角に向かったと推測されるが、この人々の境界線以前の行動や状況は十分に検討されているとは言い難い。これが我々の前稿（松尾・谷 2007）の大前提であり、このような認識にもとづいて原爆被災の欠落と思われる部分の一端を明らかにすることを目的とした。

この欠落部分には様々な事象、現象が存在しうるが、前稿では、原爆投下直後の「避難」に焦点を絞り、図の曲線で示す避難場所に至る経路あるいは通過点としての川と橋に着目し、多くの被災者がまず川と橋を目指したことを、延べ約780件の証言をもとに明らかにすることを試みた。そして、川と橋へ至る避難の過程を図2のように類型化した。

図2 川と橋への避難
出所：松尾・谷：2007, 16



前稿の言わば続編を成す本稿では、前稿で課題として残した問題、即ち、川や橋という初期避難場所に辿り着いた被災者が、その後川や橋を越えてどのように避難したか、あるいは（力尽きて）避難できなかったかを明らかにすることを試みるものである。前掲図2に従えば、右端の破線の矢印の内容を具体化することが本稿の目的である。

なお、本稿の考察に用いた方法とデータについては、既に前稿で詳細を述べたので（松尾・谷: 2007, 10-14）割愛する。

1 通過点としての川と橋

前稿では、川と橋に至る避難の過程を、図2に示すように、「挫折」、「限界」、「滞留」、「成功」という4つの類型として概念化した。本稿の対象は、最後の「成功」というカテゴリーに該当する被災者である。川と橋に辿り着いた被災者にとって、川と橋は決して最後の安全や救護が得られる場所ではない。決して避難の終着点ではない。むしろ、川と橋は避難経路における最初の重要な通過点でもある。被災者は川と橋を越えてさらに避難を続けることになる。本稿では、前稿同様証言にもとづきながら被災者がこの通過点をどのように越えて行ったか、あるいは越えられなかったかを検討する。

川と橋は一次避難先であるとともに、さらに避難を続けようとする被災者にとっての障害でもある。この障害を越える方法は幾つかある。証言から判断する限り、少なくとも3つの大きな選択肢がある。

第一の選択肢は橋を渡ること、「渡橋」、である。

第二は渡橋以外の何らかの方法で川を渡ることである。これには、歩くか泳ぐかして自力で川を渡ること、「渡河」、の可能性と、場合によっては川舟を利用すること、「渡船」、の可能性とがある。これに加えて、ただ火傷の痛みや火災から逃れるためだけに川の中に入った事例も多く見られるから、「水中避難」あるいは「川中避難」という類型を設けることも必要であるかもしれない。

第三の選択肢は、可能であれば川沿いの道、川土手（の道）を避難すること、「川岸」、である。ここで言う「川岸」には、堤防、川岸の道、川土手、土手下、

川原など川沿いの通行可能な経路すべてを含むものとする。とはいえ、避難経路としての「川岸」の選択は、川や橋を越えなくても相対的に安全と思われる方向に避難できる場合に限られる。川か橋いずれかを越えない限り避難を続けることの出来ない場所にいる、あるいは避難してきた、被災者にとってこの選択肢は意味がない。広島市中心部の地形を考慮に入れると、実際にこの選択が可能であった地域は河川の下流に向けて南下が可能であり、かつ南下が相対的に安全であった地域と、上流に向けて北上が可能であり、かつ北上が相対的に安全であった地域に限られる。以下に、南下、北上、方向の特定できない証言を順に掲げる。

----- 南下 -----

...私の家は御幸橋から宇品に向う土手道路。大勢の怪我人、焼けどの人が避難して来ました。... (22-0299)

煙と炎の道だ、熱い、逃げるのが一杯だ。川端を下へ下へと行く。南大橋迄行き、千田町を通り宇品に行く。... (34-1522)

中心部から元安川をはだかになり皮膚がむけていて、川上をさがってこられる姿を見て、... (34-7167)

被爆直後、母を捜しに勤務先に。倒れた家で道路が通れないので、その上を乗り越えて天満川の川土手に出ると、...下流の方に逃げて行く人に沢山出会いました。(34-8002)

被爆直後宇品町から平野町へ、...その折御幸橋西詰めから土手筋を北上しようと試みたが、道一ぱいになって南下して来る被爆患者のため北上できず、... (39-0001)

...天満川の堤防を級友と2人江波山の方へ行く途中、道ぞいに辛うじて避難して来た負傷者が列をなしてうづくまっていた。... (41-0012)

----- 北上 -----

被爆直後、長寿園に逃れる時、...川上へぞろぞろとまるで幽霊のような姿で、逃れていく様子... (34-7246)

...投下後約3時間位経過して市内を通過して帰ろうとしたが、各所で火災が発生しているため市内へ入ることが出来ず、太田川の可部側を通過して矢口迄上り、... (34-3628)

...父の事が気になり、市内へ太田川沿いに向いました。私とは反対に北へ北へと向う被災者の人々、... (34-7301)

----- 特定できず -----

被爆後先導者に従って川沿いに土手下を避難して行きましたが、上からは建物が焼け落ちてきたり、火の粉が飛んできてあつく、何処まで避難出来るのか心細い思いでした。...

(13-12083)

...川沿の道を肌をはがれ、もう者の様な人の列をおぼるながら見たあの時の感覚は今でも、
のう裏に焼きついて離れない。(09-0011)

...太田川の土手を避難する人達の列が続いていた。... (13-23029)

...三度もころび、己斐の川土手に出ましたら川風で空気がよくなりました、...市内よりど
とうを組んだ如くに一きと言う如くに市外を目的に逃げ始めて来ました。己斐橋も人がつ
まって渡れなくなると、私等がいる土手道を逃げ始めました。... (13-31031)

...私は勤先より火の海の中を出来るだけ川添いを歩いてようようにして下宿返で帰ると、
... (35-0246)

註：括弧内の数字は、1985年日本被団協原爆被害者調査回答の参照番号、強調は筆者、
...は省略、[]は筆者の註、を示す。以下同様。

上掲の証言に見るように、「川岸」が重要な避難経路であったことは疑いない。
しかしながら、本稿は「川と端を越えて」という副題に示唆したように、被災
者が川や橋を越えたか、あるいは越えられなかったかに焦点を絞り、避難経路
としての「川岸」の問題は割愛する。以下、証言にもとづき上述の他のふたつ
の選択肢の実態を検討する。

2 渡橋

第一の選択肢は橋を渡ること、「渡橋」である。原爆投下直後の広島市内の
橋梁の状況は表1に示すとおりである。表1では被害状況を破損による「渡橋
不可能」、「一時渡橋可能」、「渡橋可能」の3種類に分け、かつ一般橋梁と電車
鉄橋を分けて示す。電車鉄橋を含めたのは、この非常事態に際し鉄橋を渡って
避難したという記述が相当数あるからである。

表5 原爆投下直後の広島市内橋梁の状況

出所：広島原爆戦災誌、巻2、12-17及び広島新史地理編、228-229
をもとに筆者作成

(1) 一般橋梁(電車橋併用橋を含むが、その旨特記せず。)

| | 名称 | 水系 | 爆心から km | 被害状況等 (特記なきは被害なし) |
|-----|------------------|-----|------------|-------------------|
| 渡橋 | 新橋 | 元安川 | 0.5 | 半分落橋 渡橋不能 |
| 不可能 | 天神橋 ² | 山手川 | 1.6 | 吹き飛ぶ |

| | | | | |
|----------------|-------------------|-----|------------------|--------------------------------|
| | 山手橋 ² | 山手川 | 1.6 | 吹き飛ぶ |
| | 駅前橋 | 猿猴川 | 1.8 | 消失 渡橋不可 |
| 渡橋 一時 可能 | 本川橋 | 本川 | 0.25 | 大破 渡橋危険 直後板を渡し渡橋 |
| | 萬代橋（県庁橋） | 元安川 | 0.9 | 損傷軽微 直後着火 以後渡橋可能 |
| | 広瀬橋 | 天満川 | 0.9 | 午後2時頃焼失 |
| | 北広瀬橋 | 天満川 | 1.0 | 午後2時頃焼失 それ以前渡橋可能 |
| | 中央橋 | 福島川 | 1.4 | 直後渡橋可能 2,3時間後着火 |
| | 柳橋 | 京橋川 | 1.6 | 修理中 修理用木材着火 消失 投下後1時間程度渡橋可能 |
| 渡橋 可能 | 相生橋 | 本川 | 0.1 | 相当破損 多数渡橋 |
| | 元安橋 | 元安川 | 0.2 | 欄干等破損 |
| | 新大橋 | 本川 | 0.5 | 破損軽微 |
| | 天満橋 | 天満川 | 0.8 | 木部炎上 多数渡橋 |
| | 観船橋 | 天満川 | 1.0 | 橋桁緩む 渡橋可能 |
| | 横川橋 | 天満川 | 1.2 | 破損軽微 多数渡橋 |
| | 新横川橋 ¹ | 天満川 | 1.2 | 電車転落 橋自体損傷なし |
| | 明治橋 | 元安川 | 1.3 | 多数渡橋 |
| | 住吉橋 | 本川 | 1.3 | 破損軽微 渡橋可能 |
| | 稲荷大橋 | 京橋川 | 1.4 | 電車橋レール曲がるも渡橋者あり |
| | 三篠橋 | 三篠川 | 1.4 | 大破 一部渡橋可能 |
| | 観音橋 | 天満川 | 1.45 | 前年台風により湾曲 渡橋可能 |
| | 京橋 | 京橋川 | 1.5 | 多数渡橋 |
| | 小河内橋 ² | 福島川 | 1.5 | 多数渡橋 混雑きわまる |
| | 福島橋 | 福島川 | 1.5 | 欄干炎上 少数渡橋 小河内橋へ |
| | 栄橋 | 神田川 | 1.6 | 被害僅少 多数渡橋 <東練兵場> |
| | 常盤橋 | 神田川 | 1.7 | 欄干一部破損 アスファルト炎上 鎮火後渡橋可能 |
| | 鶴見橋 | 京橋川 | 1.8 | 欄干など一部着火 消火後 多数渡橋 |
| | 南大橋 | 元安川 | 1.8 | 南向に傾斜 手すり消失 渡橋可能 |
| | 猿猴橋 | 猿猴川 | 1.9 | 欄干破壊 渡橋可能 |
| | 西大橋 | 福島川 | 1.9 | 損傷軽微 |
| | 荒神橋 | 猿猴川 | 2.0 | 欄干破壊 渡橋可能 |
| | 己斐橋 | 山手川 | 2.1 | 小破 渡橋可能 |
| | 工兵橋 | 神田川 | 2.1 | 多数渡橋 牛田側からの渡橋一時制限 |
| | 神田橋 | 神田川 | 2.1 | 白島寄部分一部陥没 危険 渡橋可能 |
| | 大正橋 | 猿猴川 | 2.2 | 欄干一部破壊 渡橋可能 |
| | 旭橋 | 山手川 | 2.2 | 渡橋可能 |
| 比治山橋 | 京橋川 | 2.3 | 南側欄干落下 多数渡橋 死体累々 | |
| 御幸橋 | 京橋川 | 2.3 | 勾欄倒壊 多数渡橋 大混乱 | |
| 昭和大橋 | 天満川 | 2.7 | 多数渡橋 | |
| 東大橋 | 猿猴川 | 3.0 | 被害僅少 多数渡橋 | |
| 庚午橋 | 福島川 | 3.3 | | |

(2) 鉄道・電車鉄橋

| | 名称 | 水系 | 爆心から km | 被害状況等（特記なきは被害なし） |
|-----------|---------|-----|------------|------------------------------|
| 渡橋 不可能 | 神田川鉄橋 | 神田川 | 1.8 | 枕木発火 下り貨物列車脱線転覆 積荷のドラム缶爆発 |
| 渡橋 | 天満町電車鉄橋 | 天満川 | 0.8 | 湾曲 多数渡橋 |

| | | | | |
|----|---------|------------------|-----|------------|
| 可能 | 福島町電車鉄橋 | 福島川 ² | 1.5 | 大傾斜 渡橋可能 |
| | 太田川鉄橋 | 三篠川 | 1.7 | 8日 旅客列車初通過 |
| | 山手川鉄橋 | 山手川 | 1.8 | 6日救急列車2本運行 |
| | 己斐電車鉄橋 | 山手川 | 2.1 | 小破 運行可能 |
| | 大洲宇品線鉄橋 | 猿猴川 | 2.5 | 7日初列車通過 |

註

- 1 横川電車鉄橋などの名称あり。現「横川新橋」
- 2 天神橋、山手橋、小河内橋については、「南三篠橋」とする資料もある。本表の名称は、『広島原爆戦災誌』、2巻、17と『広島新史』、229に従う。

表1に示すように、橋の被害の程度は爆心地からの距離と材質などの要因に依存するが、多くの橋が何らかの被害を被っている。しかし、まったく被害のなかった橋は少ないとしても、焼失前あるいは鎮火後に渡ることのできた橋も含めて被災者が避難に際して渡ることのできた橋は相当数ある。このことは多く被災者にとって、橋が避難経路として重要な意味を持っていたことを意味する。約70の証言が、電車鉄橋を含め、橋を渡ったことを明示している。以下にその一部を掲げる。

----- 証言1 渡橋 -----

- ...火災になったので、...部隊の後ろにある比治山へ逃れる途中、...みゆき橋を渡る。欄干が飛んでなかった。... (08-0012)
- ...吉島の飛行場に行け、との声に、同僚と共々鷹野橋、住吉橋を経て飛行場の防空壕まで行き、... (13-27014)
- ...燃えている橋を渡って逃げたが、その橋はわたしが渡り終わったとたん、落ちてしまった。... (13-40006)
- ...帰宅途中、南観音大橋 [筆者註：昭和大橋か] を渡ると、... (13-53006)
- 丸太ん棒だけの旧庚午橋をよじのぼるようにして渡り、... (14-1031)
- 私の被爆場所、広島市鶴見町比治山町から鶴見橋を渡り、... (16-0007)
- 被爆当日南観音から昭和大橋を渡って、居住地の江波へ帰る途中... (18-0005)
- ...みんなで渡り終えた橋が焼け落ちてしまった驚き... (19-0022)
- ...子供とともに早く鶴見橋を渡らないと、焼落ちたら逃げられないからと教えたおぼえあり。
...橋を渡ってから子供別れたが、... (28-0270)
- ...大正橋が、くずれ落ち逃げまどい、猿こう橋を渡って逃げた。... (29-0030)
- ...広島陸軍病院にて応急の手当をしてもらおうと思い常盤橋を渡りましたが、...(32-0030)
- ...牛田のつり橋 [筆者註：工兵橋] のところまで火焰からのがれた無数の黒い人々が渡る順番を待っていた。... (32-0164)

比治山橋を渡り、電車通りへ出ましたところ、... (34-0039)

被爆直後やけどがピリピリ痛み、己斐橋を渡る時橋の上身動き出来ず、... (34-0409)

...親子3人連れて比治山を目当に避難したが...大正橋を渡り海田方面へと避難したが、... (34-0673)

...猿喉川にようやく出たが、東大橋まで向岸に渡るものがなく、東大橋を渡って坂横〔原註：2字不明〕小学校行の国鉄バスがあり... (34-4306)

被爆して、娘2人を連れて姉の所へ行く途中、小河内橋を渡り終ったと思ったら、その橋が落ちてしまった〔筆者註：焼失は中央橋、表5参照〕... (34-5849)

何橋かわからないが、片方が燃えていたが逃げる為必死の思いで渡った。... (34-5872)

...自分が逃げるのが精いっぱい西大橋を渡って家に帰った。... (34-6191)

...常盤橋を渡り、汽車が通る下にガードがあり、その上で汽車が引返り〔ママ〕燃えていた。その下を通る時大変恐ろしかった。... (34-7226)

8月6日は、市役所1階の職場...橋に火がついている所を走って通り抜けたり、夢中でにげました。... (34-7241)

上柳町から栄橋を通り東練兵場に逃げて、黒い雨にあいました。... (34-7257)

...体は焼けただけ水を求めて京橋川近くまで辿り着き、...橋を渡り東へ東へと流れて来る被爆者の群、歩くしかない、ただ黙々と歩く姿。... (39-0004)

西観音町から～己斐(西)にむかって逃れました。其の道すがら二ツ川橋〔筆者註：橋名不明〕をわたり、... (40-0282)

前述のように、渡橋には鉄道橋も含まれる。恐怖と戦いながら山陽線、路面電車の鉄橋を渡った被災者も少なくない。次の証言2の最後のふたつの例が示唆するように、鉄橋は通常の橋が渡れないときの選択肢でもあった

----- 証言2 渡橋：鉄橋 -----

...長い長い横川の鉄橋を一步一步渡り、己斐の駅近くまで来た時、... (13-33007)

...逃げる途中、...鉄橋の枕木のかんかくの広かった事。所々もえていて熱くて、...(22-0127)

...安古市町大町の姉(家内)の嫁先へ逃れる為、家内は三篠の鉄橋を渡り、... (34-1937)

...近所の奥さん...赤ちゃんの首が折れたれ下ったのをかかえて、小網町の鉄橋(電車)(もう火が出ていたそうです)を渡って己斐方面に逃げる途中、赤ちゃんを川に落されたそうで... (34-5980)

(大変勝手ですが、短歌でお答えいたします)...鉄橋の下を流るる焼死体兵あり女学生あり見て渡るのみ... (34-6270)

...途中、太田川にかかる鉄橋のまだくすぶっている熱い枕木の上を素足で渡った... (40-0201)

...三篠橋がとおれんから汽車の鉄橋を渡った。枕木が燃えていたが通れた。...あとで思ったが、ようあのおそろしい鉄橋を歩いたと思う。(34-5304)

...ただ一時も早くこの地獄からのがれたい一心で、橋も落ちてないので電車の線路をはって渡って、...、ただ子供を背おい一生懸命渡って、...(35-0029)

多くの被災者が一次避難場所に辿り着くことなく力尽きたことは、前稿で述べた。これと同様、健康体にとっては単なる通過点に過ぎない橋も多くの被災者にとっては長い避難路であった。次の証言の示すように、多くの被災者が橋を渡りきれずに斃れている。証言3には、橋上で斃れた被災者の事例のみ掲げたが、「橋のたもと」で力尽きた被災者も多い。橋上であれ、橋のたもとであれ、このような事例と、前稿で延べた一時避難の「限界」の事例との区別は実際には困難である。

----- 証言3 渡橋挫折 -----

...比治山へ避難する途中、平野橋[筆者註：鶴見橋または比治山橋?]で折り重なっているような一般市民も見た。...(11-0151)

全身の皮がとれ真赤になった人々が、橋の上に大勢並んですわり、話をしていた。...(13-12069)

...橋の上に死人がころがり、...(13-19027)

...特に、橋の上に横たわっていた。幼い親子連れの死の姿が、...(13-36002)

...橋の上でかさなりあって死んでいる姿等見て、...(14-0196)

...橋上にタコのゆでたような顔をした人達がいっぱいに折りかさなるようにして、死んでいる人も、かすかに息がある人も、じっと空をみたまま身動きもせずに横たわっていました。...(23-0297)

...橋の欄干に首をつっ込んで死んでいる人...(26-0007)

...多くの人が苦しさのあまり橋の上から身をなげていた事、...(27-0132)

...比治山橋の上で、母親が火傷を負い逃げ切れず子供に乳を与えながら死んだのです。...(27-0466)

...橋の上から飛び込んでそのままの人。...(34-0022)

...やっと火の中からのがれて御幸橋迄来て、たくさんの人が橋の上で死んで行きました。...(34-0516)

...みゆき橋の上にブーとふくらんだ死体がゴロゴロしていた...(34-5014)

...工兵橋のらんかんによりかかり、顔中が真赤にやけて頭髪をぶっさばいていた女の人...(34-5410)

御幸橋の上でたくさんの人が、焼けこげてうめいていたが、... (34-5413)

...橋の上に横たわっていた人を、渡る時にふみつけざるを得なかったが... (34-5626)

橋を渡るとき、らんかんに寄りすがって助けをもとめる人びとに何もせずに逃げ帰った...
(34-5641)

...橋の上に集まった真赤な裸の人々等々。... (34-5752)

...神田橋の上で全裸に近い若い娘さんが、お母さんお母さんと言って、泣き泣き地面をはいながら私をずっと見つめていました。... (34-6110)

...橋の欄干に放心状態でいる人達を多く見たが、... (34-6281)

...常盤橋、三篠橋の上の死体。... (34-7142)

...比治山橋の上にゴロゴロ、ランカンにもたれて死んでいた人、... (34-7247)

あの日、橋の上で真黒になって死んでいた人、橋げたにもたれ、フラフラな目で通る人を見ていた身動きの出来ぬ程のけがをしていた人達、... (38-0016)

体力と気力の限界以外の理由で渡橋を断念すること、「渡橋断念」、のケースもある。実際、次の証言が示すように、渡橋を諦めて別の避難経路を選択する事例も少なくない。また、多くはないが、橋も鉄橋も渡れず、他の避難経路も選択できず、その場にとどまった事例もある。この場合、前節で述べた「滞留」と結果としては同じことになり、判別は困難である。

----- 証言4 渡橋断念 -----

...一番近い橋のある駅の方へ向いました。ところがその橋のタモトが燃えていたので、その火の中をいくのがこわくて、又、元のわが家の方へ戻ってきました。... (12-0177)

...猿猴橋は渡れず、松原町沿いに南下一河を泳いで東雲町に出たが... (13-17056)

...親子3人...何一つ持たず長寿園の川[筆者註：神田川]を、橋が落ちて胸の当りまで水がある中を子供を背負い渡り、... (34-0983)

橋は落ちて皆川に入っていた。... (34-2619)

...橋が渡れず川沿いに歩いている若いお母さん。... (13-30002)

...己斐橋も人がつまって渡れなくなると、私等がいる土手道を逃げ始めました。...
(13-31031)

...常盤橋の向側が火災でわたれなく、鉄橋を渡ろうと思ったが、鉄橋の上で貨物列車が火災で燃えていてどうしようもなく、河岸に出た。... (34-1148)

自宅に帰る途中、橋が落ちていたので遠回りして帰ったが、... (27-0379)

...栄橋の向うが火の海で渡れず、夕方まで泉邸の横の川につきり、火をさけて居ましたが、... (34-7237)

...市内を出て太田川の川岸まで行くと、橋のむこうの対岸はめらめらと火の海、行くことも帰ることも出来ず、川原の砂に下りた。ぞくぞくとあたりは一面の人々、... (40-0245)

3 渡河

第二の選択肢は、渡橋以外の何らかの方法で川を渡ることである。これには、歩くか泳ぐかして自力で川を渡ること、「渡河」、の可能性と、場合によっては川舟を利用すること、「渡船」、の可能性とがある。これに加えて、ただ火傷の痛みや火災から逃れるためだけに川の中に入った事例も多く見られる。「水中避難」という類型を設け他の箱の意味からである。

ここで言う広い意味での「渡河」を考えるに当たっては、原爆投下当日の広島（当時の）7河川の状況を考慮に入れる必要がある。歩いて渡るにせよ、泳いで渡るにせよ、あるいは船で渡るにせよ、はたまた救援の船を待つにせよ、川幅、水深、流速はきわめて重要な要因である。周知のごとく、広島河川の水深は、潮の干満に大きく左右される。事実上決定されると言っても過言ではない。谷整二の調査によれば、原爆投下当日、1945年8月6日の河川の水深は、午前8時頃満潮時に最大、午後3時ごろ干潮時に最小になり、その差は2mを越えたと推定される。この変化が「渡河」と「渡船」では逆の意味を持つことは言うまでもない。また、当時の広島市の河岸にどの程度の船舶、特に小型の船舶が係留されていたかも、避難、特に船で川を渡る際には重要な意味を持つ。このように水深をはじめ、河川の状況は避難にとって重要な意味を持つが、原爆投下当日の河川の状況については、谷整二が近く別稿として公表の予定であるので、本稿ではこの問題は議論せず、これに譲る。

このように、多くの検討すべき課題があるが、ここでは差し当たり無視して、まず、「渡河」の事例から検討する。次の証言5に示すように、多くの被災者が渡河という方法を選択した。最も多い理由は、火災から逃れるためとあって過言ではなからう。そして、証言から窺えるように、渡河を試みる多くの避難者にとってそれは決して容易な方法ではなかった。証言5の最後の3つの例が示すように、何らかの補助を得て川を渡った被災者も少なくない。

----- 証言 5 渡河 -----

- ...川に死んだ遺体が5人も6人も一緒になって流れていた。私はそれをよけて川を渡ったが、
... (02-0008)
- ...その内方々から火が出て、母をさがして走っているうち大やけどした母と隣家の夫人にば
ったり会った。二人つれて川をこえて、火の出ない方ににげる。... (13-12200)
- 深い傷を受けて逃げるのがやっとの状態で川を渡り、... (13-14028)
- ...川の中は死体がいっぱい。かきわけながら泳いだ。... (13-17056)
- ...火のないところへ行かなければならず、河をいくつ渡ったか知れないが、己斐というところ
まで着いた。... (13-53007)
- ...一面の火の中を必死に駆けて本川に飛び込み、下流まで泳ぎ九死に一生を得たが、...
(20-0058)
- 炎の燃え盛る中、母が弟を抱き、私の手を引いて川向へ逃れるため河原へ下り、流れのある
深い川を渡りました。... (22-0294)
- ...川原で舟を待たされたけれども到底乗れそうにないので、軍服、軍装品をバンドで背負い、裸
になり、右手だけで途中おぼれそうになったがやっと泳ぎつくことが出来、... (32-0030)
- 昭和20.8.6日の8時頃...気が付いた時は兵舎の下敷になって居ました。そこから脱出
して太田川を歩いて渡り、西練兵場へ行った、... (33-0067)
- ...もうメラメラと火がおそって来るので川に入ろうと思ったところ、...川の中にドボンと土
手から飛んだ。...私は水を飲みながら必死で泳いだ。... (34-0027)
- ...でも親子3人何んとか元気でよかったと喜び、何一つ持たず長寿園の川[筆者註: 神田川]
を、橋が落ちて胸の当りまで水がある中を子供を背負い渡り、... (34-0983)
- ...壁の下敷となり即死した1歳の女の子を抱いて、川の中胸迄水のある処をささげて渡り、
... (34-5016)
- ...夫が八丁堀から川を泳いでかえり、... (34-5306)
- ...川を渡って己斐の方に逃げたが、川の中に死体がういていたりした。(34-6020)
- ...無我夢中で長男の手を引き長女は抱いて、川を渡り中之島まで避難した。... (34-6099)
- ...天満川に浮ぶ多数の死人の姿を、その中を死人をかきわけて横川に向って川の中を歩いた。
... (34-9017)
- ...子供を抱え川の中、見知らぬ男の方のささえで助かる。兩岸の家が焼け、その火の粉で髪
が・・・その度に川に沈む。... (38-0057)
- ...少し川上から川を渡り向岸に這い上がり野宿しましたが、... (46-0029)
- ...泉邸から1丈も下の河原に飛び降り、向こう岸へ丸太にかじりついて、必死で泳いだこと
も忘れられません(当時泳げなかったもので)。... (13-33007)
- ...妹は人を助け、横川の川の所で人を舟に乗せてもらい、妹は舟のつなを持って泳いで向岸
に着き、... (34-7099)
- 8月6日は無我夢中で逃げ、川の中を木材を浮かせて捕って、下流に1時間位行き、...
(13-47022)

自力のみによる渡河が、特に負傷した被災者にとっては、渡橋以上に困難であったことは容易に想像される。渡河途中で斃れた被災者も多い。次の証言6に、その様子を述べた証言を掲げる。これに加えて、「川の中の死体、死者」に言及した証言の数は200件をはるかに超える(松尾・谷 2007: 8-9)。これらの証言も、すべてがそうではないとしても、渡河の挫折を部分的に裏付けるものと言えよう。

----- 証言6 渡河挫折 -----

- ...猛火から逃れんと市内に造られた人工川[筆者註:不詳]を渡り力及ばず溺れ、折からの引潮に無残にも河原に置き捨てられ、... (12-0249)
- ...牛田のつり橋のところまで火焰からのがれた無数の黒い人々が渡る順番を待っていた。数人が川へ入って歩き出したが、間もなくバタバタ倒れ流れていった。... (32-0164)
- ...横川橋の下の川の中でのこと。川を渡ろうとした小学生(3、4年くらいの女の子)が、深いため渡りきれず、浮いたり沈んだりしながら、助けてー、助けてーと叫びながら、とうとう流されて行ったのを見ても、... (34-5427)
- ...すぐに立ち上って橋に出ると、川の中で大勢の生徒が肩まで水につかって「お母ちゃん、お母ちゃん」と泣き叫んでいた。... (34-7115)
- ...対岸に渡るため太田川に大やけど、大けがをした多くの人々も飛び込み、対岸まで渡りきれず溺れながら下流、海に流されながら助けを求める人々に、... (44-0041)

上の証言の示すように、渡河は容易な選択ではなかった。実際、渡河を思いとどまった被災者もあった。次の証言はその例である。

被爆後先導者に従って川沿いに土手下を避難して行きましたが、...途中泳げる人は川の中程にある中州に泳いで行くよう言われ、私も余程泳いで行こうかと思いましたが、怪我してしましたので無理をしない方がよいと思い、また川沿いに避難の列に加わって行きました。(あとでその中州に泳いで行った人達は火の竜巻にまかれて全員死亡されたと聞きました。私は九死に一生を得たのです。)... (13-12083)

4 渡船

『広島原爆戦災誌』(巻1, 27)によれば、敵機による空襲を想定して、原爆

投下以前より各河川に筏が設けられ、[船舶]部隊の舟艇が川の要所に配備されていた。また、広島河川の物流のための様々な船舶や筏が往来するのはごくありふれた日常的な光景であった(谷 2007, 18)。同時に、宇品にあった船舶司令部が、被害発生後まもなく元安川、京橋川など遡行して舟艇で救護に当たっている(『戦災誌』巻1, 222-224)。このような舟艇、筏などがどの程度被災者の避難、救援に有効であったか、換言すれば川岸、川べりに至り着いた被災者のうち、どの程度の人々が川を渡るのに船を利用したかは、残念ながら詳らかにしない。しかし、相当数の被災者が避難の際、これらの船や筏を利用したことは想像に難くない。以下の証言7が示すとおりである。なお、証言7の後半には、被災者を救援した証言を掲げる。

----- 証言7 渡船 -----

...そこにて同班の同僚4人(内1名は重傷者歩行困難)が協力して午後3~4時頃に工兵隊の渡し舟で向う岸に渡り夕方牛田地方に到着し、...(18-0011)

...白島に移って1週間後に被爆した。...どこの川か知らないが周囲が焼けてしまうまで舟にのせて貰った。...(27-0186)

...夕方になり、婦長殿友達四人で小さな舟に私をのせて、自分達は水の中に入って対岸に渡してくれました。...(27-0523)

...工場から一瞬火が出た。...「さん、あんたは上級生だ、下級生を誘導して下さい」と言われた。下級生を川に有った舟—そうに、泳げない人だけ乗って下さいと言ひ、私はそのまま先生の来られるのを最後まで待ったが、...(34-0027)

崇徳中の同級生半数は加古町へ建物疎開の奉仕で動員被爆。大芝公園から川舟で救出...(34-1933)

...同級生が工場から建物疎開に動員されて被爆し、夕方大芝の川土手に舟で連れ帰られてきた...(34-5764)

...妹は人を助け、横川の川の所で人を舟に乗せてもらい、...(34-7099)

...川にあったボートで宇品の陸軍病院へ運び、簡単な治療をうけ似ノ島へわたった。2日後に上級生は死亡した。(40-1073)

一面焼野原にて、特に川岸に助けをもとめている人で黒山のよな市民が一杯で船で助けようとするにも大変困難をした。...(06-0024)

* 救援のため会社(祇園町)を出発したのは6日の午後1時すぎ頃...いざ川舟...に乗せる段になって見ると既に息絶えてしまっている方も何人かいたと記憶しております。川舟のこととて1度に収容しきれず何回か往復したように後刻ききました。...(25-0040)

...被爆当日(6日)...火が下火になる夕方から船舶兵が川をさかのぼり、被爆して生き残っている人達を連れて帰って来られる...(34-5734)

...川の両わきにいる人達を、船が来て全部つれていった。...(34-7109)

船による避難、あるいは救援も必ずしも安全なものではなかった。相当数の挫折の例がある。最大の理由は、証言 8 の例からも推察されるように、避難者の数に比して船舶などの数と収容能力があまりにも限られていたこと求められよう。勿論、体力の限界ゆえに船から落ちた被災者もあろうし、最後のふたつの証言のように船の転覆、沈没にもかかわらず助かった被災者もある。これまで何度か言及した多数の「川の中の死体、死者」はまた、このような渡船の挫折の結果でもある。

----- 証言 8 渡船挫折 -----

- ...舟で運こばれる時に、水をくれ、水をくれと言いつつ川に落ちて死んで行った人、... (33-0128)
- ...河岸では大ぜいの人が川舟に乗って対岸に渡ろうとしていたが、川の中ほどにさしかかると川の流れてテンプクして、大勢の人がオボれた... (34-1148)
- ...私の友達が逃げる途中、近所の人に会って「お母さん大丈夫」と聞いたら、川を舟で逃げる途中川に落ちてしまったと聞いたとたん、大声でお母さん、お母さんと泣いた... (34-7217)
- ...川には筏、かき舟その上は鈴なりに人、人が重ってそのまま流れてゆく。... (38-0057)
- ...
- ...橋が落ちて渡し舟で川を渡る人々が川をはさんで何百人ずつか舟を待っていたが、その前で舟がでんぷくして舟に乗っていた人達は皆溺れたが、... (40-0206)
- ...川の方に逃げて、小舟に乗ったけど、舟がひっくりかえって、底につかまり夜の 8 時頃まで川に浮いていた。一緒に川に逃げて舟に乗った友達が、舟がひっくりかえった時、おぼれて亡くなってしまった... (34-7108)
- ...里の兄は...相生橋下から船にのり、船がしずんで、沢山の死体がういている中を下流に泳ぎ、観音町の家に戻り倒れているところを、... (34-5360)

5 水中避難

本節の冒頭で述べたように、「渡河」という避難の選択肢に関しては、自力による渡河と渡船という上述ふたつの選択肢に加えて、渡河を試みるというよりは、証言 9 に見られるようにただ火傷の痛みや火炎から逃れるためだけに川

の中に入った事例も多く見られる。理由を明示した証言は後に掲げる証言 10 にも見られる。

----- 証言 9 水中避難 1 -----

- ...苦しきのあまり、川に飛びこむ人、... (01-0118)
- ...水を飲みたさに川に飛び込む人、川の中は焼けただれて赤身が出てお腹がふくれ浮いている死体。... (11-011)
- 友達同級生焼けてあついあついと言って、川に飛び込んだりしてひめいを上げて居りました。... (11-0156)
- ...川の中にとびこんだり、道ばたに倒れてうめいていたり、... (13-12113)
- 広島の川はちょうど干潮時で、...人々は皆川の中に逃げていたが、... (16-0012)
- 熱いと叫びつつ川へ入って行った女性、... (24-0020) ...
- ...地上に熱くていられず私も川にとびこみました。みんながつかみ合いで私も意気がなく死すいっしゅんでした。... (25-0028)
- ...姉は出勤途中観舟橋上で [原爆に] あい川へ飛び込み、... (27-0344)
- やけどの人は暑きに堪えかねて、我も我も川へ飛び込んでいもを洗う有様でした。... (32-0201)
- ...川には水を求めて入った人の山、... (34-0002)
- 橋は落ちて皆川に入っていた。... (34-2619)
- ...火傷にたえられず水を求めて川へ飛び込む人、... (34-3006)
- ...川には人間がばたばたととびこんでいた。... (34-3529)
- 川に人々が逃げていた。... (34-4374)
- ...川にたくさんの人がとび込んでいる位で、あまり記憶もはっきりしない。... (34-6062)
- 爆風で吹きとばされたが、すぐ子供を抱いて川の中に入った。... (34-6155)
- ...逃げる途中、通信局の裏の川にはドボンと飛びこんでいる。... (34-7070)
- ...水を求めて川に入った大勢の人達を下に見ながら、... (34-7301)
- ...川に飛びこむ人の姿。(34-0847)
- ...川の中に飛込む人、... (42-0015)
- ...苦しまぎれに川に飛び込む人、... (45-0032)

この「水中避難」とも称すべき行動を、意図はともかく行動としては「渡河」や「渡河挫折」と区別することは困難である。次の証言の示すとおりである。

市内電車で己斐行鉄橋のある南側で「あつい。あつい。」とさけびながら数多くの人達が川に飛び込み、泳ぐ者、沈む者、這い上がらんとする者、力つきて浮いた者、等々川面は人々で一杯でしたが、... (34-2604)

実際、上の証言 9 に掲げた例でも、短い表現からだけではいずれか判断に苦しむ場合も少なくない。しかも、後に掲げる証言 11 中の例などから判断する限りその試みの多くが挫折していることからして、「渡河の挫折」との区別も容易ではない。従って、「渡河」との類似からすれば、「水中避難」は「渡河」の下位範疇として、順序からすれば「渡河」に続けて、議論すべきであるとも考えられる。しかし、本稿では「水中避難」を差し当たり別の行動類型であるとしておく。理由はふたつある。ひとつには、「渡河」、「渡船」が川を渡る、川を越えることを意図した行動であったのに対して、ここで言う「水中避難」は次の証言 10 の例が示すように、渡河の目的以上に、火災から逃れ火傷の苦痛を和らげることを意図する行動であったと考えられるからである。またひとつには、「水中避難」への言及が多いからである。実際、150 近い証言がこれに言及している。勿論、両者の関係、両者の弁別は今後のさらに検討する必要がある。

ともあれ、川の中、水の中に避難した事例を掲げてみよう。

----- 証言 10 水中避難 2 -----

川の中に数時間つかり、その横をいくつもの死体が流れ、... (13-12121)

...すぐ近くの泉邸(縮景園)に逃げましたが、その後猛烈な火災のため大きな旋風がおこり、川の中に下りて難をのがれました。... (13-19001)

...あついでとにかく皆川へ入った。...川から上がって道に横たわった。... (26-0025)

...火が廻り始めそこに居る事が出来なくなり別れを告げて川にとび込みました。... (34-0621)

鶴見町で建物疎開で招集され被爆。あまりの熱さの為川に飛び込み、其の後比治山に避難する途中... (34-0637)

...私は倒れた家や立木がもえて火が近づいてくるので、石垣の穴にさばり〔ママ〕ながら川の中におり、水につかっていた。... (34-1133)

...私は裏の川に飛び込み中州の砂上に這い上り漸く我に返った時であり、... (34-1315)

- ...爆撃にあい、1日中三篠橋の下で川につかっていた。... (34-1732)
- ...弟や生き残った家族と一緒に、川の中につかり火事からのがれた。... (34-7107)
- ...東練兵場へ逃げるつもりでしたが、栄橋の向うが火の海で渡れず、夕方まで泉邸の横の川につかり、火をさけて居ましたが、... (34-7237)
- ...やけどをしたので川の中に入ったり逃げたりしてやっと夜1時頃に帰って来たらしいです。... (34-9022)
- ...私は火の粉が飛んできて、暑いので川の中に入って行きました。... (40-0388)
- 一緒に焼けはじめたこわれた家を後にして京橋川へ逃げました。...川に夕方までは入っておりましたが、伯母は水の中に座ったまま死亡しました。私の隣に座っていた5、6歳位の女は私を母と思ったまましがみついたまま死亡されました。... (12-0024)

証言10の最後に例に記されたように、川の中に避難した多く被災者がそのまま命を失っている。水中に難を避け、元の岸や川原に戻ることは出来た、自身の体験として上記の証言を残すことのできた被災者は、むしろ少数であったのではなかろうか。100近い証言がこのことを裏付けている。以下にその一部を掲げる。

----- 証言11 水中避難挫折 -----

- ...また、水を求めて、...渴〔き〕をいやし、体を冷やしたのちそのまま絶命し、折り重なっていく様子... (01-2022)
- ...京橋川ぞいに逃れ来た人々の中には泣きわめき苦しみの余り川に飛び込んで、息が絶ゆる多くの人々... (04-0344)
- ...大田川、元安川等各川にうかが無数の死体、水をもとめ火をのがれて川に入った人々でしょう、... (07-0021)
- ...熱焼を避けるべく川に飛び込んで水面に浮かんでいる数千の焼死体。... (10-0029)
- やけどを負った人々が、きゅうり畑や、川の中にとびこんで、死んで行った様子...(13-12005)
- 水を求めて、川に飛び込み、亡くなられた方、... (13-09003)
- ...投爆時川中へ避難のため入った者は総てという程死んで浮いていた。(13-0248)
- 全身の火傷をして体が燃える為か、川の中に飛び込んだ人達が死んで、... (13-14029)
- ...キラキラ光る水面に数えきれない溺死体が浮ぶ。業火を逃れて太田川へとびこんだのだらう。... (13-21017)
- ...被爆後、何とか生きのびてきた人達が、...かわきと暑さと、傷の痛さに、後から、後から、押されるように川の中に入り、そのまま死んでいった姿。... (13-32041)
- ...水を求めて川に飛び込みそのまま死んでしまった人々... (13-35022)
- ...大正橋付近の川にとび込んで、火傷の痛みからのがれようと、川の流りに流されてい

った多くの人々の姿。... (13-35002)

...ヤケドをした人々や、その他の人々が水ほしさにあの太田川の川添に、ハウ様にして水をのんだが力つきて、そのままころがる様に川に落ちて死んで行った、... (17-0014)

...熱さのため川に入って死んだ人、... (22-0281)

...暑くて川へ飛び込んで水ブクレで死体になって、... (24-0016)

...川のそばへ行きどのかわきをとる為に、水を飲みに行き、その場でバタバタとたおれていった様子... (27-0108)

...そこでも川の水を求めて川迄行ったまま死んで行った人の姿等々。... (27-0246)

...逃げ場を失い熱さに耐え切れず川に大変な人が飛び込み熱さに耐えようとしてましたが、あたり一面ガス状態なので酸欠で死んで、まるで川に材木を浮かべた様でした。... (27-0466)

...火災をのがれ、太田川にとび込み、対岸まで行けずに死亡して行く多くの人々。... (27-0505)

...土手を下り川辺まで来て、水、水といいながら川の中に倒れてそのまま流れて行く姿。... (28-0015)

...熱さの為に川に飛びこんで苦しみながら流されていった人に、... (28-0042)

...逃げまどう途中でやけどや怪我の苦しみに水を求める人達がみんな川にとび込んで、そのまま魚がプクプク浮いたように死んで、折りかさなって流れていました... (28-0052)

...川の中に苦しさで水を求めて、くずれるように死んだ人達... (28-0078)

...市内は全部火の海となり余りのあつさに耐えかねて川に飛び込んだ人々も、水が熱湯のようになりもがき苦しんで死んで行く人たち、... (32-0078)

...比治山橋の下には水を求めに入っている負傷者のむれ、力つきて死んで行く人の無残な姿。... (32-0113)

...水を求めて川へとび込み波に流されてゆく多くの人達... (33-0161)

...福島橋の川に流れる死体、飛び込む火ダルマの被爆者の姿、... (34-1044)

...川に水を求めて集まった人達が水の中へ頭を突込んで折り重なる死体。... (34-2519)

...熱さを逃がれるためか、川の水の中に水死体となっている人がたくさん... (34-1931)

炎熱から逃れる為川に飛び込み水死した沢山の死体... (34-3103)

...火の粉が舞い上がり、呼吸困難となり、ほとんどの人が悲鳴をあげて川に飛び込み、龍巻の終わった後、人影はまばらであった(水死された)、... (34-4132)

...被爆直後級友と川に飛び込みきもちがよかったが、多くの者はそのまま死んだ... (34-4415)

...川に飛び込み、2～3回浮き沈みしてそのまま流された人、... (34-5003)

川の中に水を呑み行ってそのまま死んでいったものでしょう、沢山の人が浮かんでいました。... (34-5015)

...水をもとめて川に入った死体。... (34-5186)

...川に飛び込んだ人が死んで大勢水に浮いていた。... (34-5204)

...のどがかわいて川で水をのみにいく人がたくさんいた。そして、そこで死んでいた人もたくさんいた。(34-5855)

...やっと逃げて川で水に流される人... (34-7060)

...戦友といっしょににげる途中で、川に飛びこむも、戦友は力つきて泳げず、そのまま死んだ... (34-7106)

...避難してきた人の姿はおばけのようで、熱いので川につかり、そのまま動けなくなった人もいた。... (34-7276)

...猿猴川の表面には、水を求めたり、熱さの思いで水に入り、そのまま死んでいった遺体が、... (34-8309)

...水をもとめて川の中に入り死んで行く人も多く... (35-0157)

...その内何人かが水を求めてそれっ切り大田川に流れて行く... (35-0212)

...原爆を受けた人々が苦しさの余り水を求めて、川に這入りそのまま死んでいる姿。... (38-0097)

...橋の下では大勢の人々が熱いよう、痛いよう、と叫びながら川へ入ったり出たりして苦しんでいる人々、又苦しみながら死んで行く人々、... (40-0721)

...夜は天満川の堤防上に並べられた重傷者が、月の光に照らされて、その中水を求めて川へふらふらと落ちて行く人々の姿。... (40-1089)

...被服に火がついたそのままの姿で川に飛び込み川に浮かぶ死体... (40-1108) ...

勿論、次の証言の示すように、このほかに川に入る前に力尽きた被災者も少なくない。

昨夜はひどいなり声だったのにと、あたりを見廻し負傷者を見廻しましたところ...
水を求めて川へ近づこうと必死の努力をして途中、息絶えている姿があちこちに見え、
... (40-0712)

成否にかかわらず水中へ避難した証言ほど多くはないが、水中への避難を断念した、あるいは断念せざるを得なかったという証言も少なくない。証言12にその例を掲げる。断念という行動は、文面から判断する限り、証言11に見られる他の被災者悲惨な挫折を眼にしての判断であったと推察される。

----- 証言12 水中避難断念 -----

...川の側まで行き、水に入ろうとしましたが、真茶に川の底まで原爆が落ち〔ママ〕魚がういていてとても入る気になりませんでした。... (13-53021)

...余りの暑さに、川へ飛びこみたいと思いましたが、すでに大勢死んで浮いていました。... (19-0022)

...鶴見橋土手まで来ると、苦しみのため川の中へ入ろうとしたが、入ったら死んでしまう。
... (28-0270)

火傷の熱のために川に飛びこみたい気持ちがあったが、... (34-1408)

...川に飛び込み、2～3回浮き沈みしてそのまま流された人、私も熱くて仕方がなくても「川に入ったら死んでしまう」と自分自身に言い聞かせて避難しました。... (34-5003)

6 結び

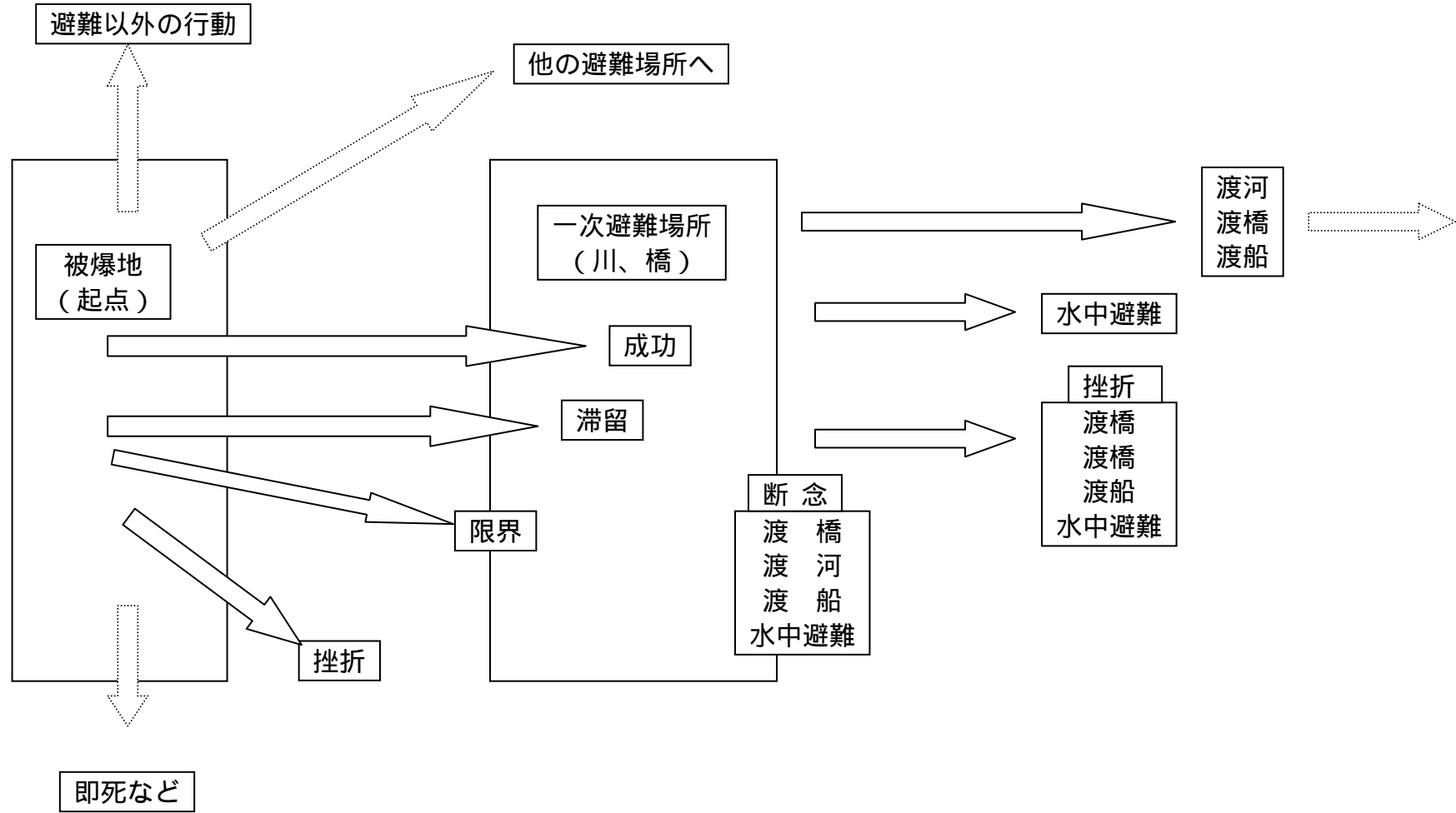
以上本稿では、川や橋に辿り着いた被災者がどのようにして川と橋を越えたか、あるいは越えられなかったかを、証言にもとづいて再構成することを試みた。

川や橋を前にし、避難を続ける余力のある被災者には、少なくともふたつの選択肢があった。橋を渡るかの川を渡るかのいずれかである。川を渡る場合、徒歩か、泳ぐか、船を利用するという選択肢がある。他方、川や橋を越える意図はなく、ただ炎から逃れるために、川中に逃れた被災者もある。体力の限界を感じたなどの理由で更なる避難を断念した被災者もある。

このような避難行動のそれぞれに関して前稿で提起した「成功」と「挫折」というふたつの結果の類型が妥当する。しかし、前稿で論じた川と橋までの避難と異なり、川と橋に辿り着いた被災者の行動については、渡橋や渡河を何らかの理由で諦める「断念」という新たなカテゴリーが必要になる。とはいえ、「断念」と前稿で述べた「滞留」とは、実際には判別が困難である。意図的意識的な「滞留」と「断念」の結果としての「滞留」は概念的には区別可能であるが、本稿のように自由記述の証言を利用するときには事実上判別不可能である。

本稿で論じた上記避難行動を、前掲図2の川と橋に至るまでの避難行動と合わせて図式化すれば、次の図3として示されよう。

図3 初期避難における川と橋



さらに、川や橋を渡りきったところで命が尽きた被災者のあったことは容易に想像されるが、何らかの方法で川と橋を越えた被災者は安全と救護を求めてさらに避難を続けることになる。

本稿は、前稿と合わせ、避難経路としての川と橋に焦点を当て、原爆投下当日の避難行動の一端を明らかにすることを試みた。図3は、川と橋を終点あるいは通過点とする避難行動の大まかな見取り図である。

本稿では、川と橋に焦点を当て、広島原爆投下当日の避難行動の一端を明らかにしたが、この目的だけに限っても幾つかの課題が残されている。ひとつは避難行動のそれぞれの類型をさらに具体的に記述することである。証言を利用するという観点からすれば、本稿で利用した証言だけでなく、さらに多くの証言、手記、記録によって補強、充実する必要がある。場合によっては、聞き取り調査が有効であるかもしれない。またひとつは、当時の川や橋の実際の状況を可能な限り詳細に再現し、避難と救援にどのような意味をもったかを明らかにする作業も残されている。

謝辞

本研究には、平成15年度前期広島大学研究支援金「原爆文学を中心とした広島原爆資料の目録作成と電子化の研究」(研究代表者:松尾雅嗣)平成17~19年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)研究代表者:松尾雅嗣)の支援を受けた。

日本原水爆被害者団体協議会(田中熙巳事務局長)には調査資料の使用を快諾いただいた。

ここに記して感謝する。

引用文献

谷整二(2007)『広島原爆投下時の避難について』、広島大学大学院国際協力研究科修士論文

広島市(1983)『広島新史』地理編

広島市役所(編)(1971)『広島原爆戦災誌』、広島市役所

松尾雅嗣・谷整二(2007)「広島原爆投下時の一次避難場所としての川と橋」、『広島平和科学』, 29, 1-25